

龍谷大学の国語

●2025(2026入試)年度は、「公募推薦入試〔総合評価型〕」、「一般選抜入試前期日程・中期日程・後期日程」とも文系型・理系型の受験型に関係なく、試験日ごとに同一の問題を使用しました。ただし、理系型では農学部の出願者のみが選択解答できました。また、経営学部「専門高校、専門学科・総合学科対象推薦入学試験」は、同一試験日の問題を古文を除いて使用しました。

1 これが傾向

2025(2026入試)年度の国語の問題は、例年と同じく、各試験日とも、

- 〔一〕〔二〕現代文
〔三〕古文

という構成になっています。設問数は漢字問題 4 問を含め、合計 28 問です。解答方法は全問マーク式で、それぞれ 4 つの選択肢の中から正答を 1 つ選びます。

〔一〕〔二〕の現代文の問題では、日本文化、言語、身体、宗教、科学、教育、文学など、さまざまなテーマにかんする文章を幅広く取り上げています。いずれも、「入試という枠組みを超えて、自分たちをとりまく現代の問題について、深く読み考えるきっかけにしてほしい」という願いを込めて、素材文を選択しています。

設問は、語句の意味、指示語の内容、あるいは接続語や語句の

補充といった基本的なものから、筆者の考えや文章全体の趣旨・主題を問うものまであり、多角的に思考力を測れるように工夫しています。

〔三〕の古文の問題も、さまざまなジャンルや時代の作品を取り上げており、読解の助けになるように、必要に応じて注もつけています。設問としては、古語の意味や文の解釈・現代語訳、文法的事項、文学史の知識のほか、作中人物の心情や文章の趣旨などを問うものがあります。いずれもオーソドックスなものですから、基礎的な学力を身につけて、内容を正しく把握できるように練習しておけば、解答可能なレベルだと言えます。

現代文・古文ともに、文章の一字一句を丁寧に読み、文意を正確に捉えることがもっとも大事なポイントです。

2 出題内容の概要

試験日・日程	問題番号	配点率	種類	出典	内容
11月23日実施分 公募推薦入試 〔総合評価型〕	〔一〕	(40%)	現代文 評論	隈研吾 『負ける建築』	モダニズム建築は、装飾を廃し機能を重視する。そのルーツであるオフィスビルは、建築を物と分離させることで二〇世紀が求める脱主体性を獲得した。また、二〇世紀には土地のソーニングにより、住宅の資産価値が安定した。 ○漢字の知識、内容理解、空所補充、趣旨把握
	〔二〕	(30%)	現代文 随筆	中野珠実 『顔に取り憑かれた脳』	素顔であれ仮面であれ、外面は常に自己の内面と深い関わりを持っており、そしていずれの外面も自己と他者の関係性からつくられる想像的共有物である。それがないと、私たちの自己は不安定になり、他者との関係もうまく機能しなくなる。 ○内容理解、空所補充、箇所説明、趣旨理解
	〔三〕	(30%)	古文	『夜の寝覚』	寝覚の上は病のため、父である入道殿のもとに身を寄せており、入道殿に出家したいという気持ちを抱えた。入道殿は娘の出家を認められなかったが、寝覚の上の境遇や過去のことを考えるうちに、出家はやむを得ないと思うようになった。 ○主語の判定、内容理解、指示部解釈、文学史
11月29日実施分 公募推薦入試 〔総合評価型〕	〔一〕	(40%)	現代文 評論	町田樹 『スポーツをめぐる技術的進歩史観の転回』	近年、アスリートが得られるデータの質は飛躍的に向上し、そこで得られた客観的知識は様々な場面で役立てられている。ミシェル・フーコーの「権力」概念を利用することで、その主客が相互に浸透していることが明確になる。 ○漢字の知識、内容理解、語句解釈、空所補充、趣旨把握
	〔二〕	(30%)	現代文 随筆	郡司ベギオ幸夫 『いきものとなまもの の哲学』	例えば、練り芥子という「部分」が焼きソバという「全体」と混ざり合うことで既存の調和を揺るがし、新たな味を生じさせるように、部分と全体といった相異なる装置が互いに一致することなく相互作用するシステムを、生命は有している。 ○内容理解、空所補充、箇所説明、趣旨理解
	〔三〕	(30%)	古文	『無名草子』	『無名草子』全体は、平安時代の物語・和歌・女性の批評を行った作品である。出題箇所は「涙」「念仏の効用」「法華経」を「源氏物語」の作者紫式部は読んでいたかどうか」などについて、何人かの女たちが所感を述べあう態度で論じている。 ○内容理解、文法、空所補充、指示部解釈、文学史
11月30日実施分 公募推薦入試 〔総合評価型〕	〔一〕	(40%)	現代文 評論	太田充胤 『踊るのは新しい体』	私たちは生命体をモノのように対象化して眼差しうる。その認識論的なスイッチについて、筆者は金森修の遺作「人形論」をひもときながら解明を試みる。そして、金森が遺した「人形の靈魂」という語義矛盾を孕む概念に迫る。 ○漢字の知識、内容理解、箇所把握、空所補充、趣旨把握
	〔二〕	(30%)	現代文 随筆	矢野利裕 『「国語」と出会いなおす』	人々は物語を構造として一般化し、登場人物等の諸要素を、読者自身の身近な現実で置き換えることで物語に共感を抱く。こうした共感をベースにした物語の受容を学校の教室で行うことで、生徒たちの間に一種の共通体験が生まれる。 ○内容理解、空所補充、趣旨把握
	〔三〕	(30%)	古文	『住吉物語』	姫君は、継母にひどい扱いをされ、侍従とともに住吉の尼君を頼り身を隠すことにした。姫君に心を寄せている少将は思い乱れる。住吉に着いた姫君は経を読み極楽往生を祈って過ごす。少将は姫君を探し続けるが見つめることができない。 ○主語の判定、文法、指示部解釈、内容理解、文学史
1月29日実施分 一般選抜入試 前期日程	〔一〕	(40%)	現代文 評論	西澤晃彦 『貧者の領域誰が排除されているのか』	野宿者は「檻のない牢獄」という固有の空間を生きている。筆者は、排除、自己否定、死を待つあきらめ、などの観点から、野宿者たちが生きる過酷な世界を描く。そのうえで、野宿者を無力化する力に対する抵抗の所在を探っていく。 ○漢字の知識、箇所説明、空所補充、内容理解、趣旨把握
	〔二〕	(30%)	現代文 随筆	荒俣宏 『理科系の文学誌』	分子が幾何学的に整然と並び結晶に対し、急冷されたガラスは秩序を欠く「液状の個体」である。カルヴィーノは、その結晶とガラスとの構造の違いを下敷きとして、ガラスの地球が「水晶の春」へと向かう葛藤の様相を描いている。 ○内容理解、箇所説明、空所補充、趣旨把握
	〔三〕	(30%)	古文	日野名子 『竹むきが記』	後醍醐天皇の軍勢が都に迫る中、名子は公宗との逢瀬に不安を抱く。六波羅探題が攻められると、名子は安居院の寺に身を隠す。その後公宗の邸に迎えられるも、実家と連絡を取ることは許されなかった。公宗は出家を考えるも説得される。 ○文法、空所補充、指示部解釈、内容理解、文学史

試験日・日程	問題番号	配点率	種類	出典	内容
1月30日実施分 一般選抜入試 前期日程	(一)	(40%)	現代文 評論	渡邊雅子 『論理的思考とは何か』	アリストテレスは自ら作り上げた論理学の体系が、日常の思考や議論ではほとんど役に立たないことを認識し、「蓋然的推論」と「例証」による日常で使える論理の体系を作り上げた。それがレトリックであり、他人を説得するための技術だと言える。 ○漢字の知識、内容理解、空所補充、主旨把握
	(二)	(30%)	現代文 随筆	金ヨシロ 『文学が裁く戦争』	1980年代の文学者たちは、幾つかの方向で戦争裁判を再現していた。その中で既存の文学と異なり、戦争裁判を描いた文学として位置付けてよいと判断が難しい代表的作品として村上春樹『羊をめぐる冒険』が紹介されている。 ○箇所説明、空所補充、語句説明、趣旨把握、内容理解
	(三)	(30%)	古文	『伊勢集』	大和守の娘・伊勢は、仕えている御息所の弟・仲平と恋に落ちる。親は将来を危惧しつつも宿命と諦めたが、果たして二人の関係は仲平の結婚により破綻する。『伊勢集』巻頭はここから始まる伊勢の半生を歌物語的に記述している。 ○文法、指示部解釈、空所補充、和歌解釈、文学史
1月31日実施分 一般選抜入試 前期日程	(一)	(40%)	現代文 評論	青木淳 『くうきをつくる』	今和次郎の考現学は、建築をヒトとモノの「諸関係」と捉えた。筆者はこれを「くうき」と呼び、表現や意味を消し続けながらそれを築こうとする。距離感を制御して心理的な切断を生み出すことは、個人の領域を守ることに繋がる。 ○漢字の知識、内容理解、箇所説明、空所補充、趣旨把握
	(二)	(30%)	現代文 随筆	上林暁 『四国路』	上林暁の私小説。昭和十九年、小説家の「私」は子供を疎開させるために、九年ぶりの帰郷を決意する。都会で人生の苦味を嘗めた「私」は、旅の途上で子供を見失う不安なども経験し、母や家族、故郷への思いを切実に深めてゆく。 ○比喩の種類、空所補充、箇所説明、内容理解
	(三)	(30%)	古文	日記 『和泉式部日記』	女は、恋人(為尊親王)を亡くして悲しみにうち沈んでいたが、恋人の弟宮(敦道親王)の求愛を受け入れ、ついに一夜を共にしてしまった。そして、女は自らの心の変化に驚くのであった。 ○指示部解釈、文法、和歌の修辞法、内容理解、文学史
2月14日実施分 一般選抜入試 中期日程	(一)	(40%)	現代文 評論	志賀信夫 『貧困とは何か——「健康で文化的な最低限度の生活」という難問』	「貧困とは何か」という問いへの答えは、時代、国、社会の違いによって異なる。同じ時代、社会の中でも人々の間で考え方が異なっている。しかし現代では、世界人権宣言などの広く認められた社会正義に反するような貧困理解は承認されがたい。 ○漢字の知識、内容理解、空所補充、指示部解釈
	(二)	(30%)	現代文 随筆	青山拓央 『コロナの時代の恋』	コロナ禍によるマスク着用の標準化が、公私の領域を分断したために、私的な自由としてあった容姿へのこだわりがルッキズムの意味を帯びるようになった。マスクは恋愛の野蠻さを顕在化させず、恋愛のあり方を変える可能性がある。 ○内容理解、空所補充、箇所説明、趣旨把握
	(三)	(30%)	古文	建礼門院右京大夫 『建礼門院右京大夫集』	㊦宮中に再出仕した作者は、昔のことを忘れられず、悲しみを深めていく。㊧作者は、まだら模様の犬の姿を見るにつけ、宮中の人々の変化を痛感させられる。㊨作者は、宮中で訴訟の審理を聞き、今は亡き恋人のことを思い出す。 ○指示部解釈、文法、内容読解、文学史
2月15日実施分 一般選抜入試 中期日程	(一)	(40%)	現代文 評論	飯田祐子 『家族ゲームの世紀』	夏目漱石の『明暗』は、近代になって導入された恋愛結婚によって結ばれた夫婦の葛藤と妥協を描きつつ、さらに夫婦の不安定な二者関係を脅かす他者の介入を通して、終わりのない複雑な家族ゲームを描いた作品である。 ○漢字の知識、空所補充、箇所説明、内容理解
	(二)	(30%)	現代文 随筆	竹内敏晴 『時満ちくれば——「愛」へ至らんとする15の歩み』	援助とは本来、生きものであれば手をさしのべるということであり、「人格」とは仮面を付けていない、すべて見通しの孤独な状態である。そして、他人を援助することは、自分の「人格」をさらけ出すこと、即ち「愛」と呼ばれる行為である。 ○箇所説明、空欄補充、内容理解
	(三)	(30%)	古文	『大鏡』	特異な個性を持つ平安時代の花山院(花山天皇)のエピソードを列記する。内容は比叡山の法師との術比べ、父冷泉院への火事見舞の様子、荀を父に送った折の贈答歌、道長の催した競馬の際の服装、絵画に優れたこと。 ○文法、指示部解釈、内容理解、文学史
3月10日実施分 一般選抜入試 後期日程	(一)	(40%)	現代文 評論	高橋恵子・柴田玲子・山川賀世子 『育つ幼児たち——子と親の関係を見直す』	人類は生き延びるために、「人とつながるための生物学的な性質」と「ヒトとつながりやすくする知恵」を進化させてきた。ヒトは自分が満足できるような他人との関係をつくることで安定するが、関係性のありようは個人個人で異なる。 ○漢字の知識、空所補充、箇所説明、内容理解、趣旨把握
	(二)	(30%)	現代文 随筆	阿辻哲次 『部首のはなし』	漢和辞典には複数の索引が用意されているのが通例である。探す漢字の読み方がわかっていれば音訓索引が最も便利であるが、読み方が解らない場合は総画索引や部首索引を使わざるを得ない。しかし、両者はなかなか厄介な存在である。 ○箇所説明、内容理解、文脈把握、趣旨把握
	(三)	(30%)	古文	『海道記』	京・白川の辺りに隠棲する作者は、若い頃から運に恵まれず、不遇を嘆きつつ老年に至り、仏道の修行に励んでいた。そんな折、良い機縁があり、これまで話にのみ聞いていた東国・鎌倉への旅を思い立つ。作者の人生や旅に至る思いが、漢文訓読調の文章で綴られる。 ○空所補充、文法、内容理解、指示部解釈、文学史

3 出題の意図と対策

現代文、古文ともに標準的なレベルの問題ですから、まずはふだんの授業を大切に、反復練習によって国語の“力”を確実に身につけておくことが大切です。

そもそも、国語の“力”には、①基本的な読み書き能力(リテラシー)、②論理的な思考力と表現力、という2つの側面があるのではないのでしょうか。①は、たとえば漢字の知識や言葉の意味を把握した上で、文章を正確に読み取ったり適切に書いたりできる力のことです。文法や修辞技法、文の組み立て方なども含めて、日本語表現を構成する基本的な事項をどれほど知っており理解しているか、そしてどれくらい正しく使えるか、ということです。一方②は、ある文章について、それが表現しようとしている感情なり思想・主張などを成り立たせている枠組みや文脈を理解する力であり、それらをふまえて論理的に文章を書く力だと言えるでしょう。入試問題では、こうした“力”が問われるのです。

〔一〕〔二〕の現代文は、かなりの分量の文章をかざられた時間で読み解かねばなりませんから、構成や趣旨・主題をすばやく的確に把握する訓練が欠かせません。そのためにも、日頃からさまざまな文章に触れ、読解することが必要です。多読と速読を繰り返しながら、文章全体の大まかな流れやテーマを上手につかめるようにしておけば、内容理解や文の挿入位置など多くの設問に対応できるはずです。

空所補充や語句解釈などの問題も例年出されていますが、文脈のなかに適切な語句を埋めたり、文脈におけるある語句の意味するところを確定したりするためには、さらに一つひとつの言葉が持つ微妙なニュアンスの違いに注意しなければなりません。ここ

でもやはり、ふだんからいろいろな文章を読んでおくことが大きな支えとなるはずです。ただし、これらの問題で求められているのは精読です。個々の表現に立ち止まり、一つひとつの言葉の意味を吟味し、まめに辞書を引いて確認しながらゆっくりと読み込むことです。そのようにして、語彙や慣用句、漢字の知識をひろげ、深めていくよう心がけてください。なお、〔一〕の問一は漢字の知識を問う問題ですが、原則として常用漢字の枠をはずれることなく、文脈のなかで漢字の意味が正確に把握できているかどうか重点をおいた設問になっています。問われているのは、あくまでも国語の基本的な“力”なのです。

〔三〕の古文も同様です。基本語彙(重要古語)と古典文法の基礎を正確に理解し、敬語などを手がかりに文の主語・述語関係を見誤らずに読むことができれば、難解な問題文でも設問でもありません。とはいえ、古語や文法を丸暗記することが有効な対策とは言えません。むしろ、具体的に古文を読むなかで、辞書で調べ確認しながらそうした知識・学力を修得するほうが、結果的に応用力もつき、入試問題にも対応できるのではないのでしょうか。その意味で、要点は現代文と変わらないはずです。ちなみに、古典文法と古典文学史について必ず最低1問ずつ出されていますが、現代文でも文法や文学史を問うことがあります。国語便覧などを参考に、基本事項を復習しておきましょう。

入試対策に王道なし。急がば回れ。成功への近道があるとすれば、それは何よりも地道に基礎学力を積み上げることと、言葉への自覚的態度と知的好奇心とを養うことにちがいません。